

初期ライプニッツの「観念論」 —1672年の運動・物体論—

“Idealism” of Leibniz’s Early Years
—A Theory of Motion and Body in 1672—

枝 村 祥 平
Shohei EDAMURA

〈要旨〉

In a letter to De Volder of 1704, Leibniz (1646-1716) proposes his idealistic thesis that matter is a phenomenon for a perceiver. A similar claim is found as early as 1672. Leibniz stated that to exist is to be sensed and bodies exist insofar as they are sensed by minds. Robert M. Adams suggests that this thesis is close to what Berkeley claims in his Treatise concerning the Principles of Human Knowledge. However, Leibniz’s view in 1672 is remarkably different from both Berkeley’s and Leibniz’s later view. In this paper I explain the essential features of Leibniz’s early version of idealism, providing an account of this view drawing comparisons to Berkeley’s view and Leibniz’s later view. In 1672, Leibniz argued that motion is mind-dependent, and bodies consist in motion, which implies that bodies are also mind-dependent entities.

〈キーワード〉

ライプニッツ, バークリー, 観念論, 物体, 運動

1 序

ライプニッツ (1646-1716) は1704年のデ・フォルダー宛書簡で、「事柄を正確に考察するならば、諸事物のうちには単純実体とそれらの表象及び欲求しかない」という (G2 270) ⁽¹⁾。後期のライプニッツによれば、存在するものは非物質的で精神に類比的な単純実体ないしモナドのみで、物質ないし物体は精神やその他のモナドによって表象された現象にすぎないともされる ⁽²⁾。こうした事情から、ライプニッツの形而上学は観念論と位置づけられたりもする。そしてライプニッツは1672年という若い時期にも、「存在する (Existere) ということは感覚される (Sentiri) ということに他ならない」と述べている (A VI iii, 56)。ロバート・アダムズが指摘するように、この主張はバークリー (1685-1753) のものと類似している ⁽³⁾。バークリーはよく知られているように、「存在することとは知覚されることである (Esse is Percipi)」とのテーゼを『人知原理論』(1710年) で示し、物体は精神に知覚される限りで存在を認められ精神から独立した存在ではありえないと主張した (L.J. 2 42)。そしてバークリーの主張はデ・フォルダー宛書簡でライプニッツが示した立場とも共通するように思え

る。というのもこの一節でもライプニッツは、物体がそれを表象するモナドから独立しては存在しないことを示唆しているように思えるからである。そうすると、ライプニッツは初期から後期まで一貫して、物体の存在が精神に依存しているという考えを保持していたとも思われる。

だが、実は後期と1672年では形而上学の枠組みも物体の存在論的身分も著しく異なっている。後期では、物体は実体の集合体 (aggregatum) として認められ (G2 444)、バークリーにおけるものとは異なった存在論的身分が与えられている。物体は表象主体に与えられた表象内容を捨象すれば無となるわけではなく、表象主体の外に存在する多くのモナドにより構成されたものとして考えられているのである。対して1672年では、物体がモナドから構成されている、とは主張されていない。ライプニッツはこの時期に、抵抗などの物体の性質をすべて運動により説明しようとし、物体が運動に存するとした。そして運動は観測者により相対的で精神に依存しており、それゆえ物体もまた精神に依存していると考えたのである。そして物体は精神による感覚の対象としてのみ存在するとされる。この立場は、より強い意味での観念論ということができよう。ただ、

この1672年の立場もバークリーのものとは異なる。ライプニッツは、意識的に表象されえない微小な運動が存在すると考えていたし、物体はバークリーの言うように色や形などに存するわけではなく運動にのみ存するものと考えていた。そして、物体は日常的経験の対象というよりも物理学の対象として捉えられていたのである。本論では、後期における議論と、1672年の議論における物体の存在論的身分をそれぞれ考察し、それらの重大な差異を浮き彫りにする。そして、1672年では、運動の相対性が物体の存在論的身分を規定するにあたり決定的な役割を果たしていることを示す。これらの考察を通じて、1672年という初期の物体の形而上学がもつ特質を、後期の議論やバークリーとの比較において明らかにするのが本論の目的である。

2 後期における物体論

冒頭でも触れたように、1704年6月30日のデ・フォルダー宛書簡では物体が表象主体にとっての現象に過ぎないとの記述があり、バークリーを彷彿とさせる。

・・・事柄を正確に考察するならば、諸事物のうちには単純諸実体とそれらの表象及び欲求しかないといわなければなりません。一方、物質や運動は、実体や事物というよりむしろ表象する者にとっての現象（*percipientium phaenomena*）であって、その実在性は、（異なる時間における）表象する者自身の調和と、[その者と]他の表象する者との調和において位置づけられます。（G2 270）

例えば私の眼前に机がみえているとする。周りに人がいれば、別の角度から何らかの形で机がその人にもみえていだろう。このように複数の表象主体に与えられた現象には対応関係があるが、ライプニッツは机は表象主体に与えられた現象としてのみ存在すると示唆しているように思える。実際この箇所を受けてルイス・ローブは、1704年にライプニッツの現象主義的立場及びモノドロジーが確立されたと論じた⁽⁴⁾。彼によれば、モノのみを実体とする立場は、物体は表象主体に与えられた現象にのみ存することを帰結するのである。

以上の解釈にはいくつかの問題点がある。まず1715年のデ・ボス宛書簡でライプニッツがバークリーに関して否定的なコメントを残していたことに留意する必要がある。

あるアイルランドの人は、物体の実在性を否定していますが、適切な理由は示されていないし、彼の見解は十分に説明されていないように思われます。私は、彼は詭弁をもって世に聞こえようとしている類の人なのではな

いかと疑っています。（G2 492）

あるアイルランド人とはバークリーであり、ここではライプニッツは物体の実在性を肯定しバークリーと異なる見解を示しているように思われる。ただここで問題となるのは、ライプニッツがデ・ボス宛書簡でモノドだけでなく延長をもった物体もまた実体だと認めうることを示唆している、という事実である。1715年と1704年とではライプニッツの主張が異なるようにも思われる。すると、仮にライプニッツが1704年にバークリーの著書を読んでもそれに対して必ずしも批判的な態度を取っていなかったのかもしれない。1704年にはライプニッツはバークリーに近い見解を持っていたが、1715年にはそれを改めたのかもしれないのである。そこでデ・ボス宛書簡の議論を追うことにしよう。ライプニッツは1712年の書簡で、実体的紐帯（*vinculum substantiale*）により多くのモノドが統一され複合実体（*substantia composita*）が形成される可能性を示唆する（G2 435）。例えば動物においては、動物の魂というモノドと動物の身体に存する多くの他のモノドは、実体的紐帯により結合され一つの有機体を形成する、と示唆されている。この有機体は、延長した身体をもちながらも一つの実体であると考えられる。そしてどの無機物も実は有機体の集合体だとされている（G6 539, 546）。これは単純実体ないしモノドのみを実体とする存在論とは対照的である。するとライプニッツは、あらゆる物体は複合実体か複合実体の集合体であり、それゆえに物体の実在性を否定したバークリーは誤っている、と主張しているようにも思える。

こう考えるにあたり問題となるのは、ライプニッツがデ・ボス宛書簡において、実体的紐帯と複合実体が存在するとは明言せず、複合実体が存在する場合とモノドのみが実体である場合に分けて議論している事実である。ライプニッツは、もし実体的紐帯が存在すれば多くのモノドから複合実体が構成され物体は確固たる実在性をもつという。一方でもし紐帯が存在しないなら物体は現象になるだろう、ともいう（G2 435）。すると、1712年以降のデ・ボス宛書簡における議論はすべて実体的紐帯が存在していることを前提としたものと結論するのは妥当ではない。というのも、この書簡ではある議論はモノドのみを実体だという理論に基づくもので、他のものは実体的紐帯の存在を前提とするものかもしれないからである。ただそれでも、書簡でのある議論が実体的紐帯の存在を前提としている可能性は否定されるわけではなく、デ・ボス宛書簡を読む限りは、上記のライプニッツによるバークリー批判は複合実体が存在すると想定した上での議論である可能性も考えられるだろう。

しかし実際は、ライプニッツのバークリーへの批判は実

体的紐帯及び複合実体の存在を前提したものではないと考えられる。というのも、ライプニッツはデ・ボス宛書簡以外でもバークリーに批判的なコメントを残しており、そこではもっぱらモノドのみを実体とする存在論に基づいて批判が行われているからである。ヴィリー・カビッツとアンドレ・ロビネは、ライプニッツが自蔵の『人知原理論』に書き込みをしていたことを指摘した⁽⁵⁾。

ここにある多くは正しいし、私の見解に合う。しかしあまりに詭弁的に表現されている。というのも我々は、物質は無であるという必要はないからである。物質は虹のような現象である、といえは十分であり、実体でなく諸実体の結果だといえは十分なのである。・・・真の実体はモノドあるいは表象者である。しかし著者は、すべてを構成する無限数のモノドに、そして予定調和に思い至るべきだったのである。

ここでライプニッツは、バークリーはモノドと予定調和に関する考察を欠いているし、物質が諸実体の結果だと認識も示していないと言っている。ライプニッツは、「諸実体の結果 (resultat)」という表現を実体の集合体と同義のものとして使う (G2 250, 275, 368; 3 636; 6 590; 7 535)。原因なしに結果が与えられないように、物体はそれを集合体として構成するモノドなしに決して与えられないからである。これに関連してドナルド・ラザフォードは、予定調和に基づけば物体はモノドによって構成された集合体として表象主体に与えられた現象と異なる存在論的身分をもつことになる、という⁽⁶⁾。ライプニッツは、予定調和に従った対応関係は魂と身体の間のみならずあらゆるモノドの間にあるという (G5 48 = NE 序文; G5 421-2 = NE 4.10.9)。このことは、例えば私が何らかの色や形をもった机を表象したときには、夢をみたり薬物などにより幻覚症状におちいつているのでない限りは、その表象内容に対応したモノドの集合体をも表象していることを示唆する。そしてライプニッツは、物体の実在性は表象主体から独立した諸々のモノドに存するとも示唆している (G2 261-2, 267)。というのもライプニッツは、あるものの実在性とはそのものにより直接的に要求されるものだとしているからである (A VI iv, 990)。モノドは集合体の構成員で、集合体の形成にあたりまさに直接的に要求され、それゆえに集合体の実在性は構成員たる多くのモノドに存する。こうして物体は、精神から独立した実在性をもつことになるのである。

では本節の最初に挙げた、物質が表象する者にとっての現象だというデ・フォルダー宛書簡の記述をどう解釈すべきか。この点に関しては、ライプニッツはときに物質な

いし物体を表象主体に与えられた現象とみなすときがあるが、多くの場合は物体を実体の集合体と同一視していることに留意すべきである⁽⁷⁾。そして、このデ・フォルダー宛書簡の一節においては物質は表象主体に与えられた現象とみなしているが、他の多くのテキストにおいては実体の集合体としての物体が念頭におかれて議論が進められている (G2 251-2; 3 69; 5 133 = NE 2.17.7)。例えば、物体がそこに内在する力をもっているとの議論は、明らかに実体の集合体としての物体を念頭においたものである (G2 251)。表象主体に与えられた現象にすぎないものが、固有の力をもって表象主体の中で動き回るとは考えにくいだろう。そしてこの実体の集合体としての物体は、バークリーの枠組みにおいては決して見出されない。

以上にみるように、後期ライプニッツの存在論はバークリーの「エッセ・ペルキピ」テーゼから導かれるようなそれとは極めて異質のものであると考えられる。ただだからといって、初期ライプニッツの議論もバークリーのものとは異質だとは限らない。もしかしたら、ライプニッツはバークリーの著作を目にしたとき、自分の未熟な時期の議論を思い出し、それに似たバークリーの立場を批判したのかもしれないのである。

3 存在するということは感覚されるということである

そこで1672年の議論を詳しくみてみよう。アダムズが言及する箇所は、ライプニッツがバークリーのエッセ・ペルキピ説に近い立場をとっていたとの印象を与えうる⁽⁸⁾。

私は、存在するということは感覚されるということに他ならないということを見出したように思われる。それは、もし我々によって感覚されるのでないなら、少なくとも諸事物の作者によって感覚されるということである。彼〔つまり神〕によって感覚されるということは、彼を喜ばせる (placere) ということ、あるいは調和的であるということに他ならない。(A VI iii, 56)

バークリーもまた、物体は精神の内なる観念に過ぎないとしながらも (L.J. 2 43)、いかなる人間も知覚していない物体が存続するということを神を介して説明していた。彼によれば、「自然の作者 (Author of Nature)」たる神に直接与えられる観念は「実在的なもの (real things)」である (L.J. 2 54)。神に与えられる観念は互いに整合的で、自然法則を保持している (L.J. 2 53-4)。だから扉は部屋を離れてもどこかへと行ってしまってもなく、戻ってくれば一時間前に見たものとはほぼ同様の色や形をもって現れる。それゆえ、家や川や山や木や石が幻であると思う必要もないのである (L.J. 2 55)。

しかしこの時期のライプニッツ立場ですら、バークリーのものとして決して同様ではない。というのもライプニッツは、物体が瞬間における無限小の運動である傾向力 (conatus) に存すると考えていたからである。この考えは、物体における無限小の運動や部分を否定したバークリーと対照的である。テキストをみてみよう。1671年の『抽象的運動論 (Theoria Motus Abstracti)』では、傾向力は無限に小さいが無ではなく、運動 (motus) の現実的部分であるとされている (G4 430)。そして物体は運動に存し (G1 72)、ひいては運動の構成要素である傾向力に存するとされ、物体の本質的属性を延長としたデカルトが批判される (cf. A.T. 7 78; 8a 41)。1672年でもその立場は引き継がれ、物体はその作用と受動が運動であるものとされ、傾向力は作用のはじまり (initium) だとされている (A VI iii, 80)。そして物体のもつ物理的性質である、運動、抵抗 (resistentia)、及び凝集 (cohaesio) は傾向力によって説明されている (A VI ii, 161; G1 71-2, 4 230)。物体は、向かってくる別の物体がもつ傾向力とは反対方向の傾向力をもつとき抵抗を示す。また物体の諸部分が物体全体の中心部分へ向いた傾向力をもっているとき、これら部分は凝集している状態にある。さらに、物体のうちには無数の傾向力があるので、無数の意識的に知覚されえないような現実的部分があることになる。そうすると、例えば数ミクロンしかない通常の視覚の対象にならない物体も、傾向力で構成されたものとして存在するということになる。このような考えは、ライプニッツとともにニュートンの微分や無限小に関する議論を批判したバークリーのものとは異質と言わざるを得ないだろう (L.J. 2 94, 101)。バークリーは、知覚されない物体の部分は存在しないと (L.J. 2 102)、無限小の運動も虚構に過ぎないと考えていたのである。

以上のライプニッツの議論に対して、微小な部分は感覚の対象として存在しえないのではないかという疑問もあろう。この疑問に答える鍵となるのは、ライプニッツがこの時期でも無意識的な表象があると考えていたという事実である。確かにライプニッツは後期に『人間知性新論』(1703-5年)などで微小表象 (petite perception) を論じるが (G5 48 = NE 序文)、前期ではこの語は使用されていない。しかしマーク・カルスタッドが指摘するように、ライプニッツは1668-9年に書かれた未完成の小論『カトリックの論証の考察 (Demonstrationum Catholicarum Conspectus)』で、精神はそのすべての作用について意識しているわけではないとしていた (A VI i, 495n)⁽⁹⁾。ここでは微小表象という語こそ使用されていないが、意識されない作用が精神にあるとされていることは明らかである。また『無神論者に対する自然の告白』(1669年)でも、「我々は心像 (imago) について考えていないときでさえ心像をもっている」と述

べられている (G4 109)。思考と意識は共に自身への作用であるとされているので (Grua 512; A VI i, 483)⁽¹⁰⁾、この記述は心像には意識されていないものもあることを示唆する。そうすると1672年でもライプニッツは意識されない表象を精神に帰していたと考えられ、微小な部分もまた精神の作用の対象として認められうる。

ただ以上の差異にも関わらず、ライプニッツは少なくとも物体が精神に依存して存在しいわば精神のうちに存在すると思ったという点で、バークリーに通じるとはいえるだろう。物体の精神からの独立存在はどちらにおいても認められておらず、また1672年の立場は後期のものとは大きく異なるということが出来る⁽¹¹⁾。後期においては、精神が表象しなくても精神の外には無数のモナドが存在し、これらが物体の実在性を担っている。これに対して1672年の立場では、確かに諸々の精神の感覚相互には一種の間主観的対応関係があるかもしれないが、物体は感覚から独立した実在性をもつものではないのである。

それでも以下にみるように、ライプニッツが物体の精神への依存を主張するに至った経緯は、バークリーのそれとは著しく異なる。面白いことに1672年のライプニッツは物理学的考察を通じて、物体は精神に依存していると考えに至った。物理学の研究に携わらずに、もっぱら色や形を伴ったものとしての物体の本性に関する哲学的考察に基づいて「エッセ・ペルキピ」テーゼを持ち出したバークリーとは異なり、ライプニッツは若くして物理学の論文を書き、かつ物理学に哲学的説明を与えようとしていた。そして、バークリーは延長しているものは本質的に精神に知覚された観念でしかないと観念論を提示したのに対し、ライプニッツは運動の相対性を根拠に物体の精神への依存を主張したのである。

4 運動の相対性

1672年のもう一つの重要なテキスト、『最小と最大について、物体と精神について (De minimo et maximo. De Corporibus et mentibus)』では、次のような仕方、「存在するということは感覚されるということである」とのテーゼが示されている。

もし精神が存在しないとしたら、すべての物体は無となるであろう。というのも、物体であるということは動かされるということだから、動かされるということは何か問われなければならない。もしそれが場所を変えるということなら、場所とは何か。場所は諸々の物体によって決定されるのではないのか。もし動かされるということが一つの物体の付近から別の物体へ移されるということなら、物体とは何かという問いに戻ってきてしまう。

こうして、物体が運動の定義に入ってこないような仕方
で運動が説明されるのであれば、物体は説明されえな
いものないし不可能なものになってしまう。動かされる
ということは空間を変えるということだ、とも言えない。
というのも、空間は物体から何ら区別されない、と結論づ
けてしまうことになるからだ。そうするとこうした循環
をさけるとしたら、結局物体と運動とは何か。何らかの精
神に感覚されるもの以外の何であるのか。(A VI iii, 100)

以上の議論のまとめると、ライプニッツによれば物体の
本質は、一種の可動性にある。それゆえ、物体は運動なし
には定義されえないし、運動なしには存在しえないと考え
られる。そして、運動は相対的なもので観測者の視点を離
れた絶対的な運動は存在しない。それゆえに運動は観測者
なしには存在しえず、従って運動に存する物体も観測者た
る精神なしには存在しえない、とされているのである。こ
こで、静止した物体も現に存在するように思われることか
ら、そもそもなぜ物体が運動に存するのかという疑問もあ
りうるだろう。この点をよく理解するために、ライプニツ
ツが1671年に述べていた物体と空間との区別、およびライ
プニッツが厳密に言えば静止している物体は存在しないと
考えた事実に触れておかなければならない。ライプニツ
ツは、もし物体が単に延長とその様態である大きさや形に存
するなら物体と空間の区別はなくなってしまうと論じてい
た(G1 72)⁽¹²⁾。物体と空間の区別がなくなることは、ライ
プニッツによれば様々な不都合をもたらす。というのも
第一に、物体を移動させても空間は同じ場所に残るからで
ある。椅子をある空間上の場所から他の場所に移動させた
とすると、当然椅子自体は別の場所に存在することになる。
しかし、椅子が占めていた空間は別の場所に移動すること
はなく、元のところに留まっているはずである。第二に、
物体は他の物体に接触してそれを動かすことができるが、
空間は他の物体に接触することも抵抗することもできない
からである。事実、物体をある空間にもってきても空間は
その物体をすんなりと受け入れる。以上により、物体と空
間は区別され、物体は大きさや形ではないものに存すると
される。そして物体は空間を運動し抵抗を示す点で空間と
異なるが、抵抗も結局内的運動により説明されるので物体
は運動に存するとされるのである。

そして先述のように、運動(ないし傾向力)に基づいて
物理的性質が説明される。物体は運動をもたなければ、抵
抗も凝集もできないと考えられたのである。すると、ライ
プニッツが物体が運動に存すると考えた動機は、物理学と
密接に関係していると言える。このような動機は、バーク
リーのものとある意味では正反対である。バークリーは、
ニュートンらの物理学とそれが提示する物体観に抗して、

色や形をともなった日常の経験で与えられる物体の世界こ
そが実在的なものとした。その動機は反物理学的・反科
学的とも評しうるもので、ライプニッツには全く見られ
ない。

以上が、ライプニッツが「物体であるということは動か
されるということにある」というテーゼを提示した背景で
ある。ライプニッツはこれを受け上に引用した箇所、次
の二つの可能性を検討する。①まず、運動が物体が他の物
体との関係で相対的に決定される場所を変えることに存す
るという可能性である。確かに、例えば電車が線路の上を
動いているとき、電車はある線路の箇所に隣接している状
態からから別の箇所と隣接している状態に移行する。だが
ライプニッツによればこのような仕方では運動を定義するこ
とは、物体の説明をもたらしえない。というのも、物体を
定義するのに運動を用い、運動を定義するのに物体を用い
るのであれば循環になるからである。②次に、運動が空間
における位置を変えることに存するという可能性である。
この可能性を排除するにあたり、ライプニッツが与えた説
明はそれほどここでは明快ではないが、おそらくライプニ
ッツはここで、運動を図る指標を空間上の一点とすれば、
その一点は物体の上の一点としてしか与えられえない(と
いうのも現実の空間は物体で充実しているのであるから)
と言いたかったのだと思われる。そうすると物体上の一点
と空間上の一点が同一視され物体と空間との区別が没却さ
れるが、実際は物体と空間とは区別されているので運動が
空間における位置を変えることに存するという想定は理論
的に妥当でないと考えられているのだろう。そしてライプ
ニッツは①と②以外に運動を精神から独立したものとして
規定し説明する手立てはないと考え、運動が精神に依存し
たものと結論づけるのである。

以上、1672年における観念論的な立場が、このような運
動の相対性の認識から導かれているという解釈を示した。
これに対してアダムズは、初期ライプニッツの観念論は、
物体は分割可能であるが実体とは不可分なものであり、従
って物体は実体ではなく独立した実在性をもたないという
議論にも依拠しているという⁽¹³⁾。この議論を物体の分割
可能性の議論と呼ぼう。実は後期の議論から理解されるよ
うに、この物体の分割可能性の議論は、物体が実体ではな
いことを示しはするかもしれないが、物体が精神から独立
した実在性を持たないことまでを結論づけるものではない。
後期のライプニッツは、物体は分割可能なものである
がゆえに、それが実在性をもつとしたらその実在性は不可
分なものに存するものでなければならない、と結論づけてい
る(G2 267)。物体は、それ以上分割できない実体から構
成されているのでなければ、精神から独立した実在性を持
たないが、精神の外には多くの精神と同様に表象と欲求を

備えた単純実体ないしモナドがあまた存在し、精神がもつ表象内容と対応関係を持ちながら存在している。そして物体はこれらのモナドによって構成されたものとしての実在性をもつのである。そうすると、物体が分割可能であるからといって、精神から独立した実在性を全く持たないとはいえなくなるだろう。

アダムズの解釈のもう一つの問題は、引用されたテキストが1672年以降に書かれたものとされる点である。アダムズはアカデミー版編集集中テキスト（Voraussetzung）の一節を引用しており⁽¹⁴⁾、アカデミー版の編集者は引用箇所は1677年かそれ以後に書かれたものであるとしている。それを踏まえてアダムズは、この箇所が1679年かそれ以前に書かれたものであると推察しているが、このテキストを根拠にライプニッツの1672年の立場を読み解くことは適切ではないということになるだろう。以上の考察により、物体の分割可能性よりも運動の相対性の方が、1672年のライプニッツにとって物体の精神への依存性を認識させるにあたり重要なものであったということがいえそうである。

さて、運動の相対性が1672年の観念論を導くにあたり決定的な役割を果たしているとして、このことが1672年の立場の独自性をどう際立たせているのか。つまり、それは後期の立場及びバークリーの立場とどう異なることになるのだろうか。バークリーは次のように考えた。物体は知覚された色や形を伴ったものとしてしか与えられない（L.J. 2 43）。知覚は知覚主体である精神なしには成立しえない。従って、物体は精神に依存的な存在者である、と。対して1672年のライプニッツは次のように考えた。物体は運動に存する。物体は静止しているようにみえても、その内に微細な運動を持って存在している。物体は意識的に知覚された大きさや形にのみ存するものではない。ただ、運動はそれを知覚ないし表象する主体に相対的であり、視点が変われば運動の方向や量も変わる。それゆえに、運動は知覚主体である精神に依存し、運動に存する物体も精神に依存した存在者だということになる。

より詳しく両者の差異をみてみよう。バークリーは次のような理由により、物体が観念に過ぎないという結論に至った。まず、我々が知覚するのは観念のみであり、物体は知覚の対象である（L.J. 2 42）。また、精神の外に物的実体の存在を想定する人は、物的実体とそれによってもたらされる観念が似ているというが、観念に似ているのは観念のみである（L.J. 2 44）。延長を持って存在しているものとは観念に他ならず、それゆえに観念とは別に精神の外に延長した実体があると考えてはならない。さらに、確かに我々は形のみならず色などの質を伴った観念を知覚したのち、色を欠くが単に形や大きさをもつ物的実体という抽象的観念に思いつく。そして、この物的実体は何らかの

仕方では精神に色などを伴う観念をもたらし、と想定したりもする。しかし実際のところは、このような物的実体がいかにして観念をもたすかは説明できず、このような想定は理論的に破綻しているとされるのである（L.J. 2 49）。

そしてバークリーは、物体が観念に過ぎないとの結論に基づき、物体を構成する可感的性質（sensible quality）として色・形・運動・におい・味を挙げている（L.J. 2 43-4）。そして物体はこれらに存し、加えて物的実体を想定する必要は全くない、というのである。そうすると、運動は物体のもつ重要な特質の一つではあるし、バークリーは物体のもつ運動ないし位置変化を軽視しているわけではない。それでも、バークリーにとっては運動は物体のもつ特質の一つに過ぎず、色などもまた同じ資格で物体の構成要素であることになる。

一方ライプニッツは1672年においてさえ、物体が意識された観念のみに存するとは考えていなかった。物体は精神に感覚される限りで存在するが、この感覚の対象としての物体はそれでも一つ一つは意識されないような微小部分によって構成されるのである。ただライプニッツは、物体が色でもにおいや味でもなく運動に存すると考えていたがゆえに、運動の相対性が物体の存在論的身分を左右する大問題となったのである。

5 結論

デ・フォルダー宛書簡では物質も運動も表象主体にとっての現象だとされ、表象主体に依存した相対的なものと示唆された（G2 270）。これはしかし、後期のライプニッツにとって、物体が精神から独立した実在性をもつことと矛盾しない。というのも、位置変化としての運動とは異なったものを物体に帰することができると考えられたからである。後期のライプニッツにとり、物体は数多くのモナドから構成されたものであり、各々のモナドのうちには内的状態の変化が見出される（G6 608 = M 10-11）。どのような観測者によって表象されていようとも、モナドは変化を続ける作用の能力をもつことには変わりはないのである。このようにライプニッツが物体のうちに内的作用を続ける能力をもったものを認めるに至った契機としては、物体において一定の量（ mv^2 を測度とする）が時間を経ても保存されることを発見したことが挙げられている⁽¹⁵⁾。一方、このような量が保存されると意識していなかった1672年のライプニッツは、物体を存続する実体から構成されたものとする強い動機をもたなかったと思われる。そこで1672年の立場では、強い意味での観念論的立場、すなわち物体は精神に感覚される限りで存在するという立場が保持されたのであろう。

しかし一方1672年の立場は、バークリーとも明確に相違する。バークリーもまた、物体が精神に依存して存在するとし精神の物体に対する存在論的優位を示唆したが、彼の立場は同時に、物理学に対する我々の日常的な感覚の優位性をも示唆するものであった。このような姿勢は現象学のそれとも通じ、現代的な意義を見出すことができるものなのかもしれない。これに対しライプニッツにとって、物体は日常的な感覚の対象であるというよりもむしろ物理学の対象であった。この姿勢は初期から後期まで一貫して保持

され、バークリーのそれに比べてライプニッツ哲学による物理学の包摂を容易にするものであった。物理学は17-8世紀において既に重要な学問分野であったし、現在もそうあり続けている。マルシャル・ゲルーが言うように哲学者たちの著作は各々固有の構造をもつとすれば⁽¹⁶⁾、彼らの体系同士の優劣を付けるのは容易ではないが、物理学という重要な分野をいかに包摂するかという課題にうまく答えられていることはライプニッツ哲学の優れた特質の一つとして評価されているのではないだろうか。

注

- (1) ライプニッツの引用は、アカデミー版全集 (A, 系列, 巻号, 頁数), ゲルハルト版哲学著作集 (G, 巻号, 頁数), グリュア版未編集テキスト (Grua, 頁数), 『人間知性新論』 (NE, 巻号, 章, 節), 『モノドロジー』 (M, 節) に依拠する。またバークリーの引用は、ルース&ジェソップ版 (L.J., 巻号, 頁数) に、デカルトの引用はアダム&タヌリ版 (A.T., 巻号, 頁数) に依拠する。
- (2) 尤も後に述べるように、ライプニッツは1712年以降のデ・ボス宛書簡で、実体的紐帯 (vinculum substantiale) が多くのモノダを統一し物体的実体ないし複合実体 (substantia composita) を形成する可能性を示唆する (G2 435)。ここではモノダに加え複合実体も実体とされるが、最晩年にライプニッツがこの考えを全面的に受け入れたかに関しては解釈が分かれており、さしあたってここでは後期の形而上学としてモノダのみを実体とするものを念頭においている。
- (3) R. M. Adams, *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist*, New York: Oxford University Press, 1994, p. 235.
- (4) L. Loeb, *From Descartes to Hume*, Ithaca: Cornell University Press, 1981, pp. 299-309.
- (5) W. Kabitz, „Leibniz und Berkeley.” *Sitzungsberichte der preußischen Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-historische Klasse*, 24, 1932, pp. 623-36. A. Robinet, „Leibniz: Lecture du Treatise de Berkeley,” *Les études philosophiques*, 1983, pp. 217-23. Cf. Adams (1994), *ibid.*, p. 224. 松田毅, 「ライプニッツの「物体論」」, 神戸大学文学部『紀要』33, 2006, pp. 1-46.
- (6) D. Rutherford, “Leibniz as Idealist” in *Oxford Studies in Early Modern Philosophy*, 4, 2007, pp. 141-90. Cf. Rutherford “Leibniz’s Analysis of Multitudes and Phenomena into Unities and Reality,” *Journal of the History of Philosophy*, 28, 1990a, pp. 525-52, “Phenomenalism and the Reality of Body in Leibniz’s Later Philosophy,” *Studia Leibnitiana*, 22-1, 1990b, pp. 11-28, “Leibniz’s Problem of Monadic Aggregation,” *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 76, 1994, pp. 65-90.
- (7) 拙論「ライプニッツにおける内的現象と外的現象」, 京都哲学会『哲学研究』585, 2008, pp. 81-103.
- (8) Adams (1994), *ibid.*, p. 235.
- (9) M. Kulstad, *Leibniz on Apperception, Consciousness, and Reflection*, München: Philosophia, 1991, p. 54.
- (10) Kulstad (1991), *ibid.*, p. 63.
- (11) なお厳密に言えば後期のモノダのみを実体とする形而上学においても、物体の精神からの完全な独立存在は認められていない。というのも、精神による表象がなくとも多くのモノダが精神の外側に存在してはいるものの、それらは元々ばらばらに存在しているものに過ぎず精神によって一つの存在とみなされてはじめて一つの物体たりうるからである (G5 133 = NE 2.17.7 cf. G2 97)。このように物体の一性は精神に依存しており、集合体の形成には構成員であるモノダと表象する精神が共に関わっているのである。
- (12) またカビッツの研究書の末尾に載せられた『現象から引き出された物体的事物の本性に関する論証の例 (Specimen Demonstrationum de Natura Rerum Corporearum ex Phaenomenis)』(1671年)では、物体を取り去っても空間は残存するとされている。W. Kabitz, *Die Philosophie des jungen Leibniz*, Heidelberg: Winter, 1909, pp. 141-4.
- (13) Adams (1994), *ibid.*, pp. 236-7.
- (14) Adams (1994), *ibid.*, p. 236. *Voraussetzung zur Reihe VI in der Ausgabe der Akademie der Wissenschaften der DDR*, Münster: Leibniz-Forschungsstelle der Universität Münster, 1982-90, p. 1872.
- (15) M. Fichant, *Science et métaphysique dans Descartes et Leibniz*, Paris: Presses Universitaires de France, 1998, p. 197. Cf. G. W. Leibniz: *La Réforme de la dynamique* Edition, présentation, traductions et commentaires par M. Fichant, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1994.
- (16) M. Guérault, *Descartes selon l'ordre des raisons*, vol. 1, Paris: Aubier, 1953, pp. 9-14.